

海外短期留学奨学生制度が始まりました

— MCPHS大学に留学して —

ちょうど1年前の本誌179号（2014年10月）では、特集記事のなかで「国際交流センター」「国際交流推進室」をご紹介しましたが、覚えておいででしょうか。そこでは、2014年7月1日付で策定された「京都薬科大学国際化ビジョン」の9項目の1つとして、「学部学生の海外派遣推進」が挙げられていました。具体的には①ドイツのフライブルク大学が開催する「日本人のためのサマープログラム」の「海外語学研修」への学生派遣。②米国MCPHS大学の本学独自研修プログラムへの学生派遣を目指す、の2点となります。①のドイツについては、すでに実施されていたものを位置づけなおしたのですが、②はまったく新たな試みです。そして、本年8月前半、2年次生と3年次生からなる最初の留学生11名がMCPHS大学へ送り出されました。

上記との関連であらたに制定された「京都薬科大学海外短期留学奨学金規則」によれば、派遣学生は2年次生と3年次生で、「学内学業成績及び語学能力を考慮して国際交流推進委員会の審査を経て学長が決定」し、また奨学金は1人あたり受講料と滞在費に相当する額（20万円が限度）、往復渡航費や傷害保険などは自己負担とされています。

本号では、本学初のアメリカへの短期留学生派遣プログラムを特集しました。引率職員として渡米した藤室雅弘教授と佐々木雄太事務員、そして11人の留学生全員から報告記事をいただくことができました。みなさんの記事を読ませていただくことにより、今回の試みがたいへん有意義であったことが窺えます。引率された4人の職員の方々のご尽力、留学生のみなさんのチャレンジ精神に敬意を表するとともに、ご寄稿へのお礼を申し述べます。来年度以降も、積極的な応募者を期待するとともに、広く本学学生のみなさんが英語力の向上に努められるよう希望しております。

KPU^{NEWS}編集委員長 鈴木 栄樹

Feature article.

■ 細胞生物学分野 教授 藤室 雅弘

今年度より始まった短期留学に引率教員として8月3日から15日まで、米国のMCPHS (Massachusetts College of Pharmacy and Health Sciences) University (以下「MCPHS大学」と記述します) に滞在しました。学生の安全と充実した留学体験を第一に考え、初年度ということもあり、参加学生11人に対し、私他に引率職員として天ヶ瀬講師、教務課の谷垣さん、国際交流推進室の佐々木さんの4人体制で引率にあたりました。

しかし、我々にとって、今回の短期留学プログラムは1年以上前から既に始まっていました。というのは、高校の修学旅行でも、海外へ行くような時代ですから、単なる海外での異文化体験だけで終わるプログラムであってはいけない、という意識があった

からです。第2期中期計画「長期休暇を活用した語学研修制度の導入」推進メンバーにより、京都薬科大学の学生が満足するプログラムにするためには、何が必要かを考えながら、留学先の選定とプログラム作成を行いました。選定するにあたって、様々な国が候補にあがりましたが、日本の薬学の一步先を行く国に、ということで、米国に絞りました。その中でもハーバード大学やマサチューセッツ工科大学 (MIT) など、世界中の科学を志す若者にとって最も刺激的な街であり、京都とも姉妹都市のボストンにキャンパスをもつMCPHS大学を選びました。そして、本プログラムと同じ時期の昨年夏、佐々木さんとともに、現地の下見を行いました。実際に学生達が学ぶキャンパスを巡り、滞在予定の寮・設備・大学周



MCPHS大学 ボストンキャンパス前

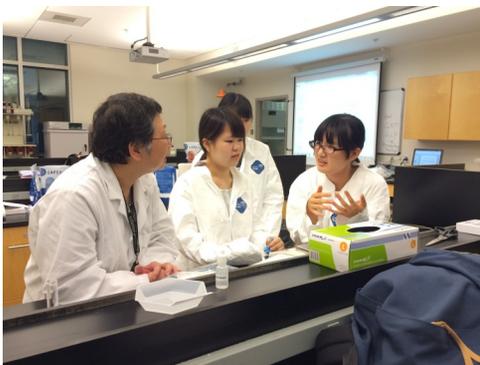
辺の安全を確認し、受け入れ校の担当者との打ち合わせを行いました。

帰国後、具体的なプログラムの作成に入りました。1日の基本スケジュールは午前中に英語学習(ESLクラス)を行い、午後は薬学専門科目の受講と病院・薬剤部見学としました。その中で、思案を重ねたのは、薬学を志す学生に特化して考えたときの専門科目の内容でした。アメリカの薬剤師と日本の薬剤師の違いをPharm. D.を持つ米国薬剤師から直に話を聞くことや、個別化医療や医療のIT化について最先端を進む米国でこそ学ぶべきと考え、それらを午後のクラスに加えました。また、海外の学生と日本の学生を比べた時、日本の学生がもっと身につけなければいけないと思うのは、英語でのプレゼンテーション能力です。しかし、一朝一夕には身に付かないのが現実です。今回の留学では、こういったスキルアップのためのモチベーションを高めることも目的の一つでした。そのような希望をMCPHS大学のスタッフに伝え、夏休み期間に講義をしてくれる教員の確保には思いのほか時間がかかり、参加学生にはギリ

ギリまで具体的な講義内容をお伝えすることができず、申し訳なく思っています。

さて、現地での学生の様子ですが、私が思っていた以上に、積極的に講義や見学で発言していました。また、病院実習中のPharm. D. コースの学生と議論したり、一緒に食事をする機会もあり、自分のヒヤリング力、スピーキング力に落ち込んだり、あるいは、言いたいことが伝わった嬉しさに満面の笑顔を見せる学生など、京菓の講義の中ではみられないような表情を垣間見せてくれました。また病院見学も、通常の語学留学では体験できない機会であり、彼らの好奇心をおおいに刺激してくれたように思います。そして、空いている時間は寸暇を惜しんで、ショッピングや観光に出かける若いエネルギーに驚きつつ、見守っておりました。

短い期間ではありましたが、この体験が彼らの今後の学びに刺激を与え、語学のみならず、国際的な視野をもち、修学意欲や薬学研究に向かうことをおおいに期待しております。



調剤実習でChuong先生に質問



ハーバード大学付属病院薬剤部見学にて質問



MCPHS大学キャンパスツアー



MCPHS Practice Lab. (模擬薬局) 見学



MCPHS大学の先生方の前でプレゼンテーション



休憩時間にMCPHS Pharm. D. コースの学生と談笑

《 MCPHS大学短期留学スケジュール 》

(現地時間)

	AM (9:00~11:30)		PM (13:30 ~ 16:00)	PM (16:00~)	Stay
8/3 (Mon)	12:30 伊丹空港集合		14:35 伊丹空港発 15:55 成田空港着	18:15 成田空港発 18:15 ポストン空港着 20:00 寮にCheck-in	ポストン キャンパス寮
8/4 (Tue)	ESL Class (Daryl Morazzin先生) 11:45 IDカードの作成		Pharmacy Lecture: 調剤実習(カプセル剤作製) (Monica Chuong 准教授) 病院訪問:3グループに分かれて ①Brigham & Women's Hospital ②Dana Farber Cancer Institute ③Beth Israel Deaconess Medical Center	16:30 ハーバードスクエア散策(全員)	ポストン キャンパス寮
8/5 (Wed)	ESL Class (Daryl Morazzin先生)		Pharmacy Lecture: 調剤実習 (子供用トローチゲミキャンディ剤調剤、 歯磨きチューブ剤調剤) (Monica Chuong 准教授)	16:00 MIT自主見学:2グループに分かれて	ポストン キャンパス寮
8/6 (Thu)	ESL Class (Daryl Morazzin先生) 12:00 Campus Tour 案内役:Ms. Sydney(PharmDコース 3年) Ms.Sydneyを囲んで昼食&意見交換(全員)		14:00 寮Check-Out Depart for Worcester by Bus	16:00 Global Reception by MCPHS 京都薬科大、浙江大学、 MCPHS職員、新潟薬科大	ポストン キャンパス寮
8/7 (Fri)	ESL Class (Daryl Morazzin先生) 12:45 Pharmacy Practice Lab Tour (実務実習施設の見学) (Joseph Ferullo准教授,Catherine Taglieri助教)		G1:ウインシーマーケット散策(女子) G2:ハーバード大のSusan J Hagen先生と USS(海軍船舶博物館)と インナーハーバー訪問(男子)	16:00 Worcesterキャンパス周辺散策 +スーパーで買い物(全員)	ウースター キャンパス寮
8/8 (Sat)	6:20出発 電車でポストンへ Harvard University Unofficial Tour (ハーバードの学生ガイド)に参加(全員)	ラン チ タ イ ム	G1:ニューベリーStとボイルストンStで買い物(女子) G2:フリーダムトレイルのジョギング・散歩(男子)	全員揃って電車でウースター寮へ	ウースター キャンパス寮
8/9 (Sun)	6:20出発 電車でポストンへ Fenway Park(レッドソックス野球場)散策(全員) Boston Museum(ボストン美術館)見学(全員)		Presentation by KPU学生 (京都・山科・KPUの紹介 & 日米の薬剤師業務の相違について)	全員揃って電車でウースター寮へ	ウースター キャンパス寮
8/10 (Mon)	ESL Class (Michael Greene先生)		Pharmacy Lecture: The US health care system(北米の保険行政) (Seoane-Vazquez准教授)		ウースター キャンパス寮
8/11 (Tue)	ESL Class (Michael Greene先生)		Pharmacy Lecture: Pharmacogenomics & Personalized Medicine (ゲノム薬理学 & 個別化医療) (Acquaah Mensah先生)	16:30 Black Stone Valley Shopping centerで買い物(全員)	ウースター キャンパス寮
8/12 (Wed)	ESL Class (Michael Greene先生) 10:45 St.Vincent病院訪問		Pharmacy Lecture: Mobile Technology & Digital Health (モバイルテクノロジーと医療) (Timothy Augnst先生)	16:00 交流会 MCPHS学生4人(Pharm.D. course) +Augnst夫妻と大学前レストランにて	ウースター キャンパス寮
8/13 (Thu)	ESL Class (Michael Greene先生) Caroline Zeird 教務国際副総長 修了証明書の授与		Presentation by KPU学生 (日米の薬剤師業務の相違について) およびMCPHS学生とのディスカッション Pharmacy Lecture: Pharmaceutical System in the U.S.A (Timothy Augnst先生)	16:00 farewell party MCPHS学生4人(Pharm.D. course) +Augnst先生とキャンパス内談話室にて	ウースター キャンパス寮
8/14 (Fri)	8:00 寮Check-Out 9:15 ポストン空港到着		13:30 ポストン空港発		飛行機中泊
8/15 (Sat)				16:00 成田空港着 18:30 成田空港発 19:50 伊丹空港着	

■8月3日～7日まではBostonキャンパスに、8月7日～14日はWorcester (ウースター) キャンパスに滞在した。

■1日の基本スケジュールは、午前(9:00-11:30)は英語(English as Second Language: ESL)クラスを受講し、午後(13:30-16:00)はアカデミックプログラムとして、薬学専門科目の授業・実習(ワークショップ形式)の受講、または病院薬剤部見学を行った。



MCPHS大学 Pharm. D. コースの学生と



MCPHS大学 カフェテリア



MCPHS大学 ポストンキャンパス寮の室内

■ 国際交流推進室 佐々木 雄太

今回、学術交流協定校であるMCPHS大学に国際交流推進室の担当として、引率しました。概要は次のとおりです。

<ボストン市概要>

マサチューセッツ州最大の都市であり、アメリカの中で最も歴史の深い町である。ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学等、市内および周辺地域には60以上の総合・単科大学があり、高等教育の中心地であるとともに、医療の中心地でもある。また、アメリカ国内でも最も安全な都市の一つとされている。1959年には京都市と姉妹都市協定を締結している。ロブスターやクラムチャウダーが名物。

<MCPHS大学概要>

旧名：Massachusetts College of Pharmacy and Health Sciences

創立：1823年

(参考：東京大学1877年。本学1884年)

特徴：全米の薬系大学の中で2番目に古く、最も規模が大きい。各キャンパスには最先端の設備・実験室を備えており、多数の病院と提携していることから多様な臨床体験を積むことができる。薬学部の他に看護や歯科衛生等18のプログラムがある。

キャンパス：ボストン、ウースター、マンチェスター



アメリカ合衆国
赤色部分がマサチューセッツ州



マサチューセッツ州 拡大図



MCPHS大学 ボストンキャンパス講義棟 (寮併設)



セントビンセント病院見学で
薬剤師のSpooner先生に質問

<感想>

今回の留学の目的は、基礎から薬学英语までの内容を実践の場で学習し、今後の英語学習意欲の向上に繋げることと、米国の最先端の授業内容を受講したり、ボストンの世界有数の病院薬剤部を見学することにより、グローバルな視点を養い、「ファーマシスト・サイエンティスト」育成の一助とすることでした。

近年、益々グローバル化されていく日本社会においても、自分の所属するコミュニティ、文化、地域のこと以外、つまり自分の範囲を超えたところも語れる、関心を示せる人材が求められてきていると思います。今回MCPHS大学に第1期生として留学した11名の学生は、この非日常の体験から、自分自身や日本の薬学、文化について、もっと客観的に理解する必要があること、クラスで隣に座っている仲の良い友達だけでなく、世界の多様な学生と競争していく必要があることを感じたのではないのでしょうか。

参加した学生には、異文化体験で味わった楽しさや悔しさを忘れることなく、今後も日常のあらゆる場面でのアプローチをレベルアップさせることに加え、国際・芸術都市である京都の大学生として、薬学だけでなく、国際交流、教養を高めることにも力を入れていただきたいと思います。

11月には本留学プログラムについて、来年度のガイダンスを行う予定ですので、興味のある方は積極的に参加してください(百聞は一見に如かず)。

あやか
■ 3年次生 杉山 絢香

アメリカへの留学プログラムに参加したのは、アメリカに行って生きた英語にふれて英語力を伸ばしたいと思っていたことに加えて、アメリカの薬学生がどのような環境で学んでいるのか興味を持ったからです。

プログラムは英語の授業、薬学関係の授業や病院見学がありました。英語の授業で特に印象に残っているのは、一定時間与えられたテーマについて英語で会話し続けるというものです。初めのうちはなかなか話が続き、もどかしい気分になりましたが4日ほどたった時には会話を楽しめるようになっていま

した。

病院見学では色々なところを見学しながらアメリカの薬剤師がどのように働いているか教えてもらったり、日本との違いについて話したりして驚くことがたくさんありました。プログラムだけでなく自由時間でも現地の人とコミュニケーションをとっていくなかで得られたものもたくさんありました。

しかし、日本の薬剤師に関することについての理解や英語力が不足していたために日本とアメリカの違いについて話をする時に苦勞することもありました。そのため今後の学生生活ではもっといろいろなことに興味を持って学んでいくと共に、英語の勉強にも力を入れていきたいです。

■ 3年次生 丹波 綾香

今回の留学の2週間は、私にとってとても貴重で濃厚なものとなりました。今後の自分のあり方を考えさせられ、自分の中で確かに変化したのを感じ、そして最高に楽しい2週間でした。

中でも衝撃を受けたのは、向こうでの病院見学でした。アメリカの薬剤師は日本とは違い担う仕事の幅が広いと、病院の至るところで薬剤師の姿を目にすることができました。薬剤師は患者さんに直接触れ、ワクチンを打つこともできます。このことを私たちに教えてくれたのは、MCPHS大学の学生さんでした。

この2週間で、私が最も楽しいと感じたのは、その学生さんとの交流です。授業が終わった後に一緒にメキシコ料理を食べに行ったりパーティをしたり…。同年代の、しかも薬学を勉強している人たちと交流を持てる機会はなかなかないので、とても新鮮かつ刺激的でした。

この他にも、私は書ききれないほど数多くの貴重な経験をすることができました。引率の先生方や今回の留学に携わって下さった方々には感謝の気持ちでいっぱいです。今回の留学で学んだこと、感じたことは微塵も無駄にせず自分へ、そして周りへ還元していきたいと思っています。本当にありがとうございました。

■ 3年次生 堀口 大介

2015年8月、2週間ほどアメリカ合衆国の東海岸に位置するマサチューセッツ州のMCPHS大学薬学部にて英語留学プログラムに参加してきました。

1週目はボストンキャンパスにて、主にアメリカの文化や慣習について学び、2週目はウースターキャンパスにて専門的な内容(医療経済学、遺伝薬学、医療IT技術など)を学びました。授業は全て英語でしたが、今まで京薬で学んできたことと被る内容もあり、容易ではなかったですが理解を深めたり、新たな発見をすることが出来ました。またアメリカの学生とお互いにプレゼンをし合う機会もあり、言語の

違う相手に対して言いたいことを伝えることや質問の意図を汲み取ることの難しさを学びました。

休日は、自由観光をすることができ、私は陸上部ということもあり、フリーダムトレイルというアメリカ独立戦争にまつわる16ヶ所の史跡を巡るコースを走りました。

本学でのアメリカ留学は、勉強もプライベートも大いに充実しており、非常に満足のできる内容でした。この体験で専門である薬学はもちろん英語に対する勉強のモチベーションが上がりました。来年以降、参加を考えている方は、有意義なプログラムなので是非検討してみるといいと思います。

じょうなん
■ 2年次生 上南 静佳

2015年8月3日から15日までの約2週間、米国マサチューセッツ州にあるMCPHS大学への短期留学に参加しました。研修に参加する前の私は、毎日の講義や課題、バイトに追われ、自分の進路の方向性も見えないままに大学に通っていたように思います。

研修中は幾度となく、言語の問題が付きまといました。自分の意見を多くの人に伝えるにあたって、言語の重要性を再認識しました。しかし、実際英語が上手く使えないことよりも悔しかったことは、学術講義や学生達との討論の中で、薬学に関する専門知識や日本の医療制度に関して、自分がいかに無知であるのかを思い知らされたことでした。そこで改

めて、積極的に学ぶ姿勢が欠けていた自分に気が付きました。また、他国の医療系大学の学生・教授が集まった交流会では、自分の夢を語る学生が多くいたことに驚き、意見を交換することで、自分の夢の可能性が広がったように感じます。

よねおか ななこ

■ 2年次生 米岡 那夏子

私の留学の目的は“自分を変える”ことでした。大学に入って2年目になり、受験期からの憧れと薬剤師という職業の現実が入り混じった中で、自分が受け身になっている感覚があり、何かを変えるためのきっかけが欲しいと思っていました。その目的を達成するという面で、今回の留学は大いに意味があり、成功したものと言えます。

初めて英語だけの薬学の講義を受け、同じ目標に向かって学ぶ他国の大学生と話をすることで、将来に対するモチベーションが高まりました。

特に印象に残っているのは、現地の大学生や先生

これからは、言語力やコミュニケーション能力向上に加え、何事にも探究心を持って、積極的に学ぶことを意識して行動していきます。このような気づきの機会を与えてくださった大学に感謝申し上げます。

方と一緒に食事に行った時のことです。日本の薬学教育や流行など普段身近にあるものについてうまく話せず悔しくも思いましたが、英語で世界中とコミュニケーションをとれることの喜びを知りました。

また毎日が発見や驚きの連続で、もっと学びたい、理解したいという気持ちが生まれ、今後の目標ができました。周りの支えや意識の高さ、私の拙い英語に一生懸命耳を傾けてくださったMCPHS大学の先生方のおかげで充実した日々を過ごすことができました。このような機会をいただけたことに感謝の気持ちでいっぱいです。今回の経験を糧として、これからも頑張っていきたいと思います。



ウースターからボストン観光に
出発！



ボストン美術館



ステーキハウスにて

■ 2年次生 伊丹 里花

私はこの夏2週間のMCPHS留学に参加しました。この留学が初めての海外渡航だったので、英語がしゃべれない私にとっては不安でいっぱいでした。

講義内容は午前には英語の授業で、発音の練習やアメリカの文化を学んだり2人組で会話の練習など、楽しい授業でした。午後は病院見学などの実習や薬理学や薬局システムなどについて学び、アメリカでは調剤は調剤師が行い、薬剤師はワクチン接種や血液検査を行うことができると知った時はとても驚くとともに、アメリカの薬剤師は権限が広いと感じました。

休日はハーバード大学とマサチューセッツ工科大学のツアーやボストン美術館へ葛飾北斎展を見に

行ったり、ボストンの町を散策することができてとても楽しかったです。また、中国人留学生やMCPHS大学生との交流パーティーもあり、お互いの文化や趣味について、たどたどしい英語ながらも楽しい時間を過ごすことができました。

普段英語で会話する機会がなかったので、英語がなかなか聞き取りにくく何回も聞き直してしまうことが多くありました。また、知っているはずの単語も忘れてしまい、思ったことをうまく伝えられないことも多く、もっと英語力を上げる必要があると感じました。

この2週間で海外の文化に触れることができ、とても貴重な経験をすることができました。この経験を将来に活かしていきたいと思います。

■ 2年次生 折方 琴音

まず初めに、今回の留学プログラムに参加させていただきただけに感謝いたします。

さて、今回の留学が、私にとって初留学でしたが、非常に実り多いものでした。元々、英語が苦手、嫌いだったのですが、将来、国際的に活躍したいと思っていたので、このプログラムに参加しました。と言っても、英語が苦手なため、授業や病院見学の説明が完璧に理解できたとは到底言えません。しかし、逆に、ここまで理解できるようにならねばいけないのだと知ることができました。

まずは、この留学で英語に対するマイナスイメージは払拭できました。次は、薬学の専門的なことま

で理解できる語彙力、リスニング力をつけていきたいです。そして、自分を高めてくれたもう一つのこととは、他国の生徒と、自分の夢などについて語り合えたことです。日本にいと、なかなか夢や薬学部に入学した理由について真剣に語り合う機会はありません。しかし、他国の生徒とは自然にこのような会話をしていることが多く、色んな話を聞くことができ、世界が広がりました。

最後になりますが、今回の留学に引率して下さった4名の職員の方々、その他今回の留学に関わってくださった全ての方々に感謝いたします。そして、たくさん助けてもらった10人の留学メンバーにも感謝します。みんなとこの留学に参加でき、本当に良かったです。

■ 2年次生 澤田 ひかり

今回の短期留学では、多くのことを学んだ。私は、特に医療におけるアメリカと日本の違いに驚かされた。アメリカでは、iPhoneと連動させて使用する機械やアプリによって血糖値などが測定でき、さらにその情報が医師に転送されるなど、とても近代的なシステムが確立されている。日本でもこのような機械やアプリは存在しているようだが、あまり浸透していない。これからは、日本でもこのようなシステムが活用されるべきではないかと思った。

逆に、日本の医療に対してMCPHS大学の方々も驚か

れていた。例えば、日本の薬剤師の役割が幅広い点である。アメリカでは、いくつかの専門で分類されており、決めた専門の薬剤師にしかたれない。このように、各国で医療の考え方が異なることが知れた。

また、MCPHS大学の学生さんとも交流する機会があり、医療についてだけでなく、お互いの文化についても話し合うことができ、とても楽しい時間を過ごすことができた。

MCPHS大学への留学によって、英語のスキルを上げるだけでなく、自分の医療に対する理解も深まった。この経験を将来にも生かしたいと思う。

■ 2年次生 藤田 かほ

MCPHS大学での2週間の留学において、今までには味わったことのない充実感と沢山の刺激を受けました。

講義では主にアメリカの文化について、専門的な薬物動態や薬理について学びました。病院や薬剤部の見学に行ったり、調剤実習では日本とは違った様々な調剤をしました。日本の医療制度、薬剤師業務との違いや医療の高度化など実際に目で見たり聞いたりすること全てがとても刺激的でした。

MCPHS大学で学ぶ薬学部生と交流する機会も沢山ありました。初めはためらいましたが、次第に積極的に会話できるようになり、一緒にご飯を食べ音楽の話で盛り上がりたりして、英語で会話することがとても楽しくなりました。講義でも会話でも十分に理解できない時はとても悔しく、自分でもっと勉強したいと思いました。

土日にはハーバード大学やボストン美術館に行ったり、ロブスターを食べたり、ボストンの街並みに感動したりとボストンの文化にも触れ充実していました。

多くの体験により、薬学、英語についての意識関心が高まっただけでなく、自分の視野が大きく広がりました。日本人以外の方との交流の中で日本人との気質の違いや考え方、感じ方の違いに触れることで、世界にも意識を向け、自分の考え方ももっと前向きに様々なことに挑戦しようと思うようになりました。あっという間の2週間でしたが、私の中ではとても大きな変化を与えてくれた貴重な2週間でした。

このプログラムに参加でき本当に良かったです。連れて行って下さった先生方、MCPHS大学の方々、一緒にプログラムに参加した皆、アメリカで出会った沢山の方、送り出してくれた両親に感謝します。この経験をこれからの学習や生活に活かしていきたいです。

■ 2年次生 山下 直人

2015年夏、私はアメリカ合衆国のMCPHS大学への短期留学プログラムに参加しました。

11泊13日のプログラムで、最初の1週はボストンキャンパスにて、2週目はウースターキャンパスにて英語での講義を受けました。

すべて英語で進められる講義だったので質問を理解することもそれに対して解答することもとても難しかったです。また、講義後の空き時間や休日にはボストン市内を観光しました。食事のためにレストランに行ったり、お土産を買うためにショップに立ち寄ったりしましたが、そこでも相手の言う事はよくわからないし、自分の英語は思うように相手には

伝わらず、とても苦勞しました。病院見学にも参加しましたが、目に見えるものだけしか分からず、案内して下さる方の話はほとんどわかりませんでした。

科目としての英語にはそれなりの自信があり今回のプログラムにも参加を決めました。現地では英語でのコミュニケーションがうまくとれず、歯がゆい思いをしました。しかし、プログラムに参加してよかったと思っています。自分の英語力の足りなさに気づき、もっと英語を勉強しようと思えたからです。なので私は、英語学習のモチベーションを高めたいと思っている人にこのプログラムをお勧めしたいです。

■ 2年次生 吉澤 正人

アメリカの学生は疑問があれば、先生が講義をしている最中であってもどんどん質問をし、一つひとつの疑問を解消して、次の段階に進むようにして学んでいた。しかし、私は講義中に積極的に質問をすることができなかつた。また、質問に対して指名されなければ、自分から答えようとはしなかつた。私は日本での毎日の講義を真面目に受けていたが、私には主体的に学ぶ姿勢が欠けていることに気づかされた。また、講義中に行つた双方のプレゼンテーションからは、日本とアメリカの薬剤師の類似点や相違点を発見することができた。

日本では6年制薬学教育を卒業した者に学士(薬学)が与えられるのに対して、アメリカではPharm. D. という職能学位が与えられる。Pharm. D. の修得方法には2つの方法がある。1つ目は、prepharmacy schoolでの教育(2年間)の後、4年間の薬剤師養成課程を経て、2年間の研修を修了し修得する方法である。2つ目は、一般的な大学での教育(4年間)の後、4年間の薬剤師養成課程を経て、2年間の研修を修了し修得する方法である。

て、2年間の研修を修了し修得する方法である。2つ目は、一般的な大学での教育(4年間)の後、4年間の薬剤師養成課程を経て、2年間の研修を修了し修得する方法である。

薬剤師の職務としては患者に接し、鑑査、服薬指導、副作用のチェックを行うなどは同じであったが、アメリカの薬剤師にはワクチン接種が行える権限があつた。また、日本では調剤は薬剤師の職務であるが、アメリカでは主にテクニシャンという別の職種が担っていた。調剤をテクニシャンが担っているからこそ、薬剤師は患者と接する機会が多くなり、十分に患者のケアができるシステムとなつていた。

短期間であつたが、留学を通して異なる考え方や文化に出会えたことは大きな収穫であつた。今後は諸外国の医療制度や薬剤師の在り方などについて広い視野に立って学びを深め、自身の理想とする薬剤師像の構築に活かしていきたい。



ESLコース修了証が最終日に授与されました



BOSTON RED SOXのホーム球場前にて